

第4回かづの未来会議

日 時：令和2年8月6日（木）18時30分～20時15分

場 所：鹿角市役所 第1・2会議室

出席委員：11名（欠席：4名）

出席職員：〔政策企画課〕阿部課長、古田政策監、
畑澤主査、海沼主査、佐藤主査

1 開会（進行：政策企画課 古田政策監）

ただいまから、第4回かづの未来会議を開会いたします。

2 会長挨拶

予測のつかない昨今、未来を考えるのは非常に困難ですが、このような時でも希望を持って、前向きなご意見をいただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

3 議事

資料1・2・3

説明：政策企画課 海沼主査

（委員）経営戦略1の指標になっている「市外から人が訪れたい魅力のあるまちだと思うか」というアンケートの設問で、肯定する回答が低いと感じましたが、今、新型コロナウイルス感染症の影響で、どこの地域も自由に行き来できないような状況です。だからこそ、市外から人が集まるまちはどんなまちなのかをじっくり考えて対策ができる時期なのではないかなと思います。他の指標の基準値となるアンケート結果は悪くないと感じます。住んでいて、そこまでは不満がないのではないかと感じます。でも、魅力があるのかと聞かれると、自信をもってあると言えていないので、みんなが鹿角の魅力に気がついて「魅力がある」と言えればいいと思います。

（委員）よくまとまっていると思います。基本戦略の1で指標となっている「地元産業が元気で活力があると思う人の割合」について、今年の結果が低いと思いました。仕事に関してなのか、農業に関してなのか分かりませんが、魅力が感じられないのかなと思うので、これからどうしていくかが大切だと思います。

（委員）経営戦略2の「ヘリテージ・ツーリズム」の意味を教えてください。

（事務局）通常の文化財保護に留まるのではなく、文化財の価値と観光分野とを融合し、観光による収

入の増加と、それとともに文化財を守っていくという関係性を築き、産業と文化の両方の振興を図ることを目指していくものです。花輪ばやしや大日堂舞楽などのほか、今後は大湯ストーンサークルをつなぎ合わせて鹿角の誇るものを全国に発信していきます。

(委員) 結婚や子育ての希望を実現するということは、具体的に取り組んで欲しいと思います。公共交通の部分は、高齢化社会では必要なことだと思うので、具体的に進めて欲しいです。

(委員) 都市経営で攻めるという部分に、違和感があるのですが、都市経営というのは具体的にどういうことを言っているのでしょうか。

(事務局) 行政経営だけではなく、民間企業やNPO法人、自治会など、様々な市内関係者と連携しながら、効率的で持続していける都市の経営をしていくということです。

(委員) 「まちなかエリアへの緩やかな人口の集約を促進」とあり、まちに人を集めるイメージを持つのですが、そうすると、耕作放棄地が増えることが考えられますし、農村部に通いながら農業をするというのも現実的ではないので、集約というよりは、今ある現状を生かすやり方があるのではないかと思います。

(事務局) 郊外でのびのびと暮らすというライフスタイルを望む人はその通りに生活してもらいたいのですが、鹿角市を一つのまちとして捉えたとき、中心市街地は、他地域からも訪れやすく、まちの核となる機能を維持し、まちを使ってもらえるようにしていかなければならないという考えで組み立てています。例えば、結婚をして子育てするときに中心市街地にある空き家や空き地を利用したいという希望を持つ人が居るのであれば、中心市街地の賑わいにもつながります。強制的に集約するのではなく、個々の暮らしを守りつつ、中心市街地の機能を維持できるようなまちづくりを進めていかなければならないと考えています。

(委員) 機能を集約するのは必要だと思いますが、住む場所はそれぞれ住みたいところにした方が、田舎らしくて良いと思います。住んでいる側からすると、今の暮らしを子どもたちや未来につなげたいという思いがあるので、置き去りにされている感じがします。

(事務局) 誤解を招きやすい部分ですが、人口減少が進む中では、農村部だけではなく生活の利便性が高いはずの中心部でも空き家が増え、商店もなくなり人が居なくなってしまうというのは、都市のあり方としてマイナスではないかという考えです。例えば、高齢者の方で、交通の便を考えてまちなかに移りたいと思う人がいれば、まちなかを利用しやすいように進めたいですし、一方、自然の中で暮らしたいという人には、誇りを持ってそのまま住んで欲しいので、この施策以外のコミュニティの部分などで支援したいと考えています。

(委員) 基本戦略5の取組方針の「自ら学び行動する社会人を支援します」というところですが、会社員として働いていると、学ぶ時間を作ることが難しいですし、そもそも学ぼうと思う社会人がどれだけいるのか考えると、難しい取組みだと思います。インプットは楽ですが、実際に行動してアウトプットするのはハードルが高いので、そういう人材がたくさん育成されることを願いますが、会社の理解など環境が整わないと難しいと思いました。

(委員) 基本戦略5の「未来に羽ばたく人材を育てる」というところの説明で、最後が、まちづくりを推進するという表現になっていますが、人材育成とまちづくりのつながりをどういう風に解釈すればよいのでしょうか。

(事務局) 人を育てることも鹿角市のまちづくりの一環であると捉えています。学んだことを生かして、地域の元気につながるような人材育成の場を提供することで、理想を高く持ち、未来に羽ばたく人が増えるようなまちづくりをしていこうという意味です。

(委員) 経営戦略3は、前回会議では「行政の経営力を高める」となっていたと思うのですが、「まちの経営力を高める」と変更したのはなぜですか。

(事務局) 効率的な行財政運営を進めながら、戦略的には未来技術の導入などによって、行政だけではなく、まち自体が経営力をつけて自治体間競争に勝っていくように、攻めの分野で取り組むと位置づけています。

(委員) 経営戦略2の取組方針にあるヘリテージ・ツーリズムは、世界遺産の商品化ということであれば、外貨の獲得を目指す経営戦略1にも入るのではないですか。

(事務局) どちらの要素も持つものですが、ヘリテージ・ツーリズムは「世界遺産のまち」をつくる大きな鍵になると考えています。今ある文化財を活用して知名度を高め、さらに経済活動につなげていければ「世界遺産のまち」に近づいていくだろうという考えで、認知度を高めることと外貨獲得の両輪で進めていくということで、経営戦略2に位置づけています。

(事務局) 経営戦略1に入れてもいいと思いますが、あえて経営戦略2に出しています。「世界遺産のまち」と名乗れるところは多くないので、外貨獲得の観光の中でもあえて、強調させるために独立させています。

(委員) 資料2の20ページに出てくる「まち使い」という言葉はどういう意味ですか。

(事務局) 市民にまちの機能を使ってもらいたいという意図で使っています。例えば、商店街は単に商業機能だけではなく、ふれあいの場という機能もありますので実際に訪れて欲しいという思いを込めています。

(委員) 将来都市像のコンセプトとして、「バランスのよい年齢構成のもとに」という文言が入っているのですが、人口減少の中では年齢構成も大切だとは思いますが、この言葉を入れた方がいいものなのですか。

(事務局) 今後、10年かけてまちづくりをしていく上で、将来都市像の根幹は、持続可能なまちを築くというところで、まちが持続可能であるからこそ、ふるさとの価値観や大事なものを継承していけると考えています。全国どこの自治体も人口が減少する中では、人口増加は非常に難しいのですが、年齢構成のバランスを保つことができれば出生数も維持できますし、高齢者や生産年齢人口の極端な変動がなく、社会的な負担も抑えられると考えています。将来都市像を目指すための重要な要件として、あえて追加しています。

(委員) 前回の会議から今日まで、世の中がすっかり変わってしまい、人の考え方も変化していると思います。例えば、市内のホテルや飲食店で、外から来ていたお客さんがいなくなってしまったために、地域経済のことを考えるきっかけになっていると思います。今、感染症が問題になっている時だけ対策するのではなく、感染症が収束した後も、地域の中で経済が回るように、みんなで取り組むことでまちの良さにも気づくと思います。外からモノや人を呼び込むだけではなく、市内の人も市内のモノを使うというのが加わるといいと思います。以前、地域の方とお話する機会があったとき、自分のところを自慢しないということが話題になりました。アンケートでは魅力的なまちだと答える人の割合

が低い結果となっていますが、心の中ではみんな良いまちだと思っているかもしれないと感じました。
(委員) 大切なのは、鹿角市を外にどのように発信していくかだと思います。小さい子どもの頃から鹿角の魅力を知り得るような教育が必要だと思います。まちに人や外貨を呼び込むことも必要ですし、地産地消も必要だと思います。鹿角市で電力会社を立ち上げて、市内の学校などの施設の電力をまかなう仕組みになっているので、そういう部分をもっと強化していければ良いと思います。スキーと駅伝のまちと謳っている都市も他にないと思うので良いと思っています。

(委員) アンケートで、安全安心して住めるという回答の割合が高いのですが、他の地域より雨量が少ないとか、地震の被害がなかったということであって、実際に何か起きたときに大丈夫かなという不安もあるので、普段から安全のために道路や橋などの点検をして、それが市民にも分かりやすいように示してもらえれば良いと思います。また、クマの被害が気になります。農作物の被害だけでなく、民家に近いところまでも行動範囲が広がっているので、今までとは違う危険も考えられるようになっていて感じています。

(会長) この計画通りに進めばとても良い未来になると感じますが、やはり人口減少や税収の減少は避けられないと思うので、そのような理想と現実を市民がきちんと理解して、計画の実現に向かって頑張るという思いを共有できれば良いと思います。基本戦略1で、副業による人材のシェアという考えも必要ではないかと思っています。また、新規の起業も大事ですが、事業承継も大切だと思います。交通弱者支援と同じように買い物弱者への対応も求められるのではないかと思います。コンパクトなまちづくりについては、限られたお金で平等なサービスを目指すには取捨選択が必要なので、バランスよく進めていかなければならないと思います。

(委員) 基本構想5に「未来に羽ばたく人材を育てる」とありますが、地元の人が頑張らないと産業も育たないと思います。これから高校が合併しますが、観光の学科やITの学科とか特色のあるクラスをつくり、その生徒たちが10年後に仕事に就けるように育てないといけないと思います。高齢者は、ボランティアなどで活動している人が多いですが、若い人が少ないので、鹿角の柱になるような人を育てないといけないと思います。

(委員) 人材育成に関しては、今の情勢で就労形態が変わっているので、鹿角の若者ももちろんですが、外部からの優秀な人たちも鹿角を盛り上げる可能性があると感じています。どこまでこの状況が続くかによって変わりますが、人材確保の方法も変わってくるのではないかと考えています。

(委員) 事業展開の方向性で、武蔵野大学かづのサテライトキャンパス事業とありますが、せっかく鹿角に目を向けている大学もあるのであれば、もっと進めていけたらいいと思います。

(委員) 自ら学び行動する社会人育成とありますが、子どもたちの身体能力が低下しているという話を聞いたことがあり、身体のバランスがきちんと育まれていることが思考能力にもつながると思うので、人材育成の部分では小さい頃からの教育も大切で、子どもの体づくりも欠かせないと思います。

(事務局) 高校統合が4年後にあります。現段階で、県では通常の進学コースの他に、未来創造コースのような学科を設ける方向性を示しています。どのような人材を育てていくのかというのは基本戦略5になりますが、取組方針の「地域の特色ある教育活動を実施します」という部分が、鹿角らしさが出てくるところだと思います。現在も、小学校や中学校でふるさと学習やキャリア教育を進めていますので、さらに取組みを深めることで、子どもたちが地域に目を向ける起点になるのではないかと

考えています。また、保護者も自分の仕事をどれだけ子どもに伝えられているかということも大事になると思いますので、家庭教育事業などもフル活用しながら子どもの教育に取り組んで行かなければならないと考えています。

7次総について、現段階の策定状況は、お示ししている取組方針までのところですが、この会議後は、具体的な事業を立案しながら組み立てて行きます。サテライトキャンパスについては、この2年ほど武蔵野大学の学生を夏休みの1か月間受け入れていますので、そのつながりを深め、1年生のプログラム体験だけではなく、大学の上級生や院生等の「知」を市の施策に活用して行くことも考えています。また、まだ案の段階ではありますが、地元の中高生もその研究の中に入って地域課題を探究してもらいたいと考えています。一度鹿角を離れても、地元の課題について深く学んでいれば、戻ってくる可能性も高くなるのではないかと考えていますし、戻って来やすいような支援策と合わせて両輪で進めていきたいと考えています。

(委員) 販売重視型の農業というのはどういうことですか。今でも販売はしていますが、重視するというのはどういう意味ですか。

(事務局) 端的に言うと市場性が高いものを作るということです。水田機能の維持は大切ですが、米は収益性が低いので、複合農業として儲けになる作物を作り、農業で生活できるようにするということです。

(委員) 農業は組み合わせが大事です。売れるものと言っても、収穫時期や作業時期が重なると、両方うまくいかないこともあるので、夏はキュウリで秋は果樹を収穫したり、水稻と枝豆を組み合わせたりすることが大切です。また、売り方も大事なので、直売や個人での販路拡大など、体制づくりも大切だと思います。

(委員) 先ほどの学生の取組みの部分で、地域の課題とか地域の問題とか、ネガティブな表現が気になったので、課題だけではなく、ここで実現できることがあるという視点にたった表現方法にした方が良くと思いました。

(事務局) ネガティブな見方だけではない視点もあると思いますので、子どもたちが関心を持てるような事業にしていきたいと思います。

(事務局) 本当は、地域を「面白がれる人」という言葉を使いたいのですが、計画の文章になじまないものでこのような表現にしていますが、取組みとしてはポテンシャルを持つ地域として進めていきたいと考えています。

(委員) 消防団の入団促進とありますが、実際には減少しているし、人口も少なくなる中で、加入者の確保は大変なのではないかと思います。人命や財産を守る大切な機能なので、具体的に考えないといけないのではないかと思います。

(委員) 「世界遺産のまち」とありますが、鹿角市以外に世界遺産が2つあるまちはあるのですか。

(事務局) 世界遺産と無形文化遺産がありまして、我々は総じてカギ括弧をつけて「世界遺産のまち」と表現していますが、現時点では京都市など11の市町村で2つの世界遺産があります。

(委員) 他にもそういう都市がある中で「世界遺産のまち」と言いたいということですか。

(事務局) 今後の見込みを含めると、大湯ストーンサークルや毛馬内盆踊りなどもあるので、鹿角は4つとなり、京都市の5つに次いで2番目の多さとなる見込みです。ですから「世界遺産のまち」と名

乗れるだけのものは持っていると考えています。

(委員) 個人的には、今でも2つあるのは誇りに思っていますし、すごいことだと思うのですが、見込みを含んでの表現だと心配になるので、今の時点でも自信をもって発信した方が良いと思います。

(事務局) 市民アンケートの詳しい分析はこれからですが、30代以下の世代がまさに魅力がないと回答している人が多くなっているのも、皆さんからいただいたご意見をもとに取組みを進め、まちの魅力を実感できる人が増え、底上げできるようにしていきたいと考えています。

(委員) 何をもって魅力があるかだと思います。魅力がないという人は自然の豊かさなどに興味がなく、都市部にあるようなエンターテインメントを求めているのだと思います。

(事務局) 魅力的な職場があるかということも包含されているかもしれませんが、若い方たちが活躍できる地域でなければならないというのは委員のみなさんのご意見の通りだと思いますので、力を入れて進めていきたいと思っています。

(委員) 自然以外のエンターテインメントが欲しいと言う人が多いなら、例えば花輪の商店街をエンターストリートにして、空き地などを高校生が昼間に遊べるような場所にできれば良いと思います。

(委員) アンケートに関して、高齢者福祉についてなど、もっと小さな項目に分けると結果が違わないかと思います。そのように前向きな結果になるような設問にして、市民の意識を変えていけばいいのではないかと思います。

(事務局) アンケートの実施状況としては、住みごこちや愛着などを訪ねる設問もあり、年代が高くなると愛着を持つ人も増える傾向が見られます。

その他

(事務局) 今後、この体系に基づいて事業の肉付けをしていきますが、今回、皆さまからご意見をいただきまして、大きな方向性の相違はないものとして進めさせていただきたいと思っています。現在、基本構想についてパブリックコメントも実施しておりますので、今日の会議で意見できなかったところがあれば、ご協力いただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

4 閉会 (20:15 終了)